

## 大項目 1 大学の理念・目的

(目標)

大学の設立の趣旨や理念・目的さらに専攻領域の特性に基づき、教育目標を明確に定めるとともに、そのなかでいかなる人材を養成しようとするのかを具体的に明示する。また、こうした教育目標に則って、教育研究活動に必要な組織・制度とその諸条件を整備し、目標達成に向けて研究活動をおこなっているかどうかを点検する。

### 1. 大学の理念・目的

(大学・目的等)

A群 大学の理念・目的・目標とそれにとまなう人材養成等の目的の適切性

[現状把握]

本学の教育理念・目的・目標は、次のように学則に定められている。

「美術、デザイン及び建築に関する学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の技能、理論及び応用を教授研究し、人格の完成を図り、個性豊かな教養の高い人材を養成し、もって文化の創造発展、国家社会の福祉に貢献することを目標とする。」(武蔵野美術大学学則第1章、昭和37(1962)年創立)

この理念は、本学の設置者である学校法人武蔵野美術大学の歴史的起源である帝国美術学校(昭和4(1929)年創立)に遡る。帝国美術学校は、その後、武蔵野美術学園、造形美術学園、武蔵野美術学校、武蔵野美術短期大学、武蔵野美術大学へと改変され、発展してきた。建学の精神はそのなかで、次のように引継がれてきた。

本学は従来の武蔵野美術学園の伝統と教育実績を継承し、さらにそれを創造的に発展させる意図のもとに発足したものである。学部の名称が造形学部というのも耳新しいが、本学開設の意義は、わが国においてユニークな性格を担って、新しい真の造形教育の方向を樹立しようとする処にある。(昭和37(1962)年、設立趣旨より抜粋)

本学が継承する帝国美術学校の教育理念と目的は以下の7点に要約されるものであった。

1. わが国国体の本義を重んじ、芸術教育を以って国家に貢献せんことを期す。
2. 芸術の深奥を極め、以って人生価値を高めることを期す。
3. 我が国古来の芸術伸展の源泉を探り、その粋を闡明せんことを期す。
4. 東洋並び西洋芸術の神髓に触れ、日本芸術をして、世界的芸術たらしめんことを期す。
5. 現代の実生活に即して、適切なる芸術の発展を企図せんことを期す。

## 大学の理念・目的

6. 皇運隆昌の宏謨に浴し、我が国芸術の特殊なる立場に於いて新芸術の確立に資せんことを期す。
7. 一般教養に抛りて心性を陶冶し、鑑識を高め、以って芸術の向上を図らんことを期す。(昭和 10 (1935) 年、「帝国美術学校創立趣旨」)

上述の事項の中には内発的に意図されたものばかりでなく、その当時の厳しい社会状況を反映したことも含まれている。それらのなかで、初期の教育活動において、制作、教養、工芸がこの領域の教育の主要な柱として立てられ、教育の実践のなかでは、制作者養成ばかりでなく、美術教育者の養成の重要性も自覚された。

このことは、教育の特色を示した次の一文に示されている。

1. 実習の教授である。本校では帝展、院展、二科、春陽、国画、無所属の各派にわたって優秀な作家を選んでいる。
2. 学科の教授である。人としてまた作家としての教養に学科の教授は、広く各分野に於ける優秀な人々をお願いしている。
3. 工芸教育である。本校は工芸図案科はいうまでもなく、工芸その他の方法によって途を開こうとしている。
4. 師範科の教育である。」(昭和 10 (1935) 年、「帝国美術学校の存立」、『帝国美術』創刊号)

このなかで、最初の二つ、実習と学科の特色については、たとえば、因襲化し形式化していた当時の「アカデミズムに迎合せず創造性を尊重することとし、かつ精神主義的な人間形成を志向することが支持された。(略) 技術の研摩だけでなく、豊かな情感と知性を導くようにする。(略) 指導は徒弟的一面性でなく、多くの人の中で学生自ら発見工夫するようにする。」(昭和 54 (1979) 年、米澤嘉圃、「50 周年を迎えるに当たって」として当時の美術界を批判的に検討しながら真に創造的であることが目指されたものである。また、工芸教育については、狭義の美術に限らず、工芸をはじめとして関連する分野を包含しながら、それらの各分野の制作にとって相互作用的に刺激を与えあうような「造形」という新しい芸術領域の確立を志向したものである。「造形」という新たな芸術領域創出の意義は創作のためばかりでなく、それによって、あるいはそれを超えて、美術の社会への波及、浸透、影響等社会的な役割が意図されたものである。本学造形学部が、その後、あらたな学科や通信教育課程を設置してきたのもこの教育理念の具体化であるといえる。美術を通じた社会的な役割の自覚は、最後の師範科の教育という特色として、長く継続されてきた。今日、師範科に対応する学科は本学には設置されていないが、この考え方のもとに、美術教育者を輩出してきたし、現在も輩出し続けている。さらに、美術館学芸員や、最近では高校における情報科教育を制作の立場から指導しうる社会教育や学校教育における教育者、美術と社会を媒介する多様な人材の養成にも注力している。

本学の教育理念・目的・目標を歴史的な発展にしたがって整理すれば、(1) 清新で創造的な制作者の養成、(2) 教養をとおした人間形成、(3) 総合的な美術分野としての造形分野の確立、(4) 美術と社会を媒介し社会との関係性や影響力を持つ分野の創出や人材養成、の 4 つに集約される。

造形芸術の専門教育をおこなう本学はいかにあるべきか、という最も基本的かつ理念的な課題について忌憚のない意見交換をする場としての専任教員全員を中心とする合同会議（箱根研修会、後に全学研修会）を昭和 40（1965）年以来、毎年開催してきた。たとえば、そのテーマは、「本学の教育理念に関して：大学の今日的役割」（昭和 40（1965）年）、「本学における人間形成の在り方」（昭和 41（1966）年）にはじまり、最近では理念を具体化するカリキュラム改編や教育組織等の課題に移行している。

学長主導のもとに、本学の理念を踏まえた、さらに現在の社会情勢に配慮して、本学の進むべき方向を検討するために、平成 11（1999）年に将来構想委員会が設置された。この委員会の成果は平成 15（2003）年度に答申された。主要な事柄として、通信教育課程の設置、教育カリキュラムの改編があるが、教育カリキュラム改編の検討の中で、また本学の中長期目標を策定する中で、本学の教育資源と共に、教育理念が点検され、その骨子が全学に示されるとともに、先述の全学研修会において、「2007年の本学の在り方」として、本学の教育構想、国際化時代の高等教育、教育理念、各学科の教育ビジョン等として提言され、討議された。

本学では、50周年事業として、昭和 54（1979）年に本学の歩みを検証した。さらに、その後、『武蔵野美術大学 60年史（1929-1990）』によって、本学における理念と、その具体化としての教育活動の展開が検証された。この活動は、今日でも、大学史史料室によって持続的に行なわれ、たとえば、本学の創設時の資料の編纂と出版、たとえば『武蔵野美術大学大学史資料集 第一集』等は、創設時の建学の精神を掘り起こし、理念を点検するための作業であるといえる。

#### [点検・評価]

本学の教育理念は、現状把握で述べた通り、「それぞれの専攻の専攻に関わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを目的とする。」学士課程の基準に合致している。またその点検を不断に行なうための組織である自己点検評価委員会を有し、点検評価活動をおこなっている。さらに、重要事項については、全員参加による研修会を開催し、討議をおこなっている。

#### [改善・改革方策]

大学の理念・目的およびその適切性は、今日の状況においては、大学をとりまく社会的、国際的な、大学の外からの観点から検証される必要がある。本学は、国際部を設置するとともに、早くからヨーロッパにおける主要な美術大学である高等美術大学（ボザール、フランス）、ミラノ工科大学（イタリア）、ヘルシンキ美術デザイン大学（フィンランド）、ノッティンガム・トレント大学（イギリス）と学生の交換をはじめとする交流をし、今日ではこの交流はアメリカやアジアの多くの大学に及んでおり、これらの交流を通して、本学の教育理念が比較され検証されている。さらに、平成 16（2004）年には産官学共同研究を推進するために研究支援センターを設置し、本学の

## 大学の理念・目的

教育研究がこの観点から顧みられることになった。

### A群 大学の理念・目的・目標の周知の方法とその有効性

#### [現状把握]

本学の理念は学則に明記されており、学則は武蔵野美術大学規約集（冊子）をはじめ、ウェブページ、CD-ROMで刊行されている。またこれは、ガイドブックや履修案内、入学希望者向けの大学案内、等多くのメディアで閲覧することができる。

また、平成 21（2009）年の創設 80 周年事業に際して、「武蔵野美術大学の教育理念：80 年に至る歩みと 21 世紀の展開を見据えて：真に人間的自由に達するために」として、理念はじめ考え方が明らかにされている。さらに、この機会に本学の理念を要約し、身近にするためのコンセプトワードが公募され、本学の理念の社会的な周知のために活用されるよう目論まれている。

1929(昭和 4)年 10 月 1 日、帝国美術学校は吉祥寺の地に創立された。その建学の精神は、金原省吾の手記に「教養を有する美術家養成」と記され、また名取堯の回想に「その框を固定せず、しかも放縦に任せず、真に人間的自由に達するような美術教育への願い」とであると語られている。1930(昭和 5)年の校歌では北原白秋が「道に遊ばむ」、「堪へて忍ばむ」、「外へ矜らむ」と謳った。このように、美術を技術的専門性だけではなく、総合的な人間形成をもって成るものと考えた。まさに人間的自由に達するために美術・デザインを追求することこそが、本学の教育理念と言えるのである。

建学の精神は、20 世紀の激動の歩みの中でも追求され続けてきた。帝国美術学校は、幅広い美術と教養を修得することで専門性を磨いていく教育課程を樹立し、多くの卒業生を送り出した。戦後、1946(昭和 21)年の造型美術学園、1948(昭和 23)年の武蔵野美術学校、1957(昭和 32)年の武蔵野美術短期大学、1962(昭和 37)年の武蔵野美術大学造形学部と続く流れは、時代のなかの建学の精神の顕現と言える。

さらに美術・デザインが多様に広がりつつある 21 世紀においても、本学は新しい試みを展開し続けている。2002 年度に開設された造形学部通信教育課程は、総合課程と 4 学科 9 コースの専門課程を備えて生涯教育時代の専門教育を志向している。2003 年度からスタートした新教育課程は学科横断的な選択制により専門性を形成する基本を培うものである。また 2004 年度からの大学院博士後期課程は本学の従来の基盤に立ってさらに突出した人物の育成を目指している。また、多摩アカデミックコンソーシアム(TAC)参加大学や早稲田大学との単位互換や、世界各国に及ぶ 8 校の協定校のうち 4 校との交換留学生制度は、世界と地域に開かれた広がりをしめすものである。さらに 2004 年には通信教育課程新宿教室をはじめとした積極的な展開を目指して新宿サテライトを設置した。また、産官学共同研究の推進ため、研究支援センターを置いた。さらに 2004 年から 6 年間にわたる建築計画が開始され、2007 年の 12,000 平米のアトリエ棟の竣工や、美術資料図書館の拡充をはじめとした抜本的な施設拡充を推進している。(平成 17 (2005) 年 8 月「武蔵野美術大学の教育理念：

80年に至る歩みと21世紀の展開を見据えて：真に人間的自由に達するために」、『創立80周年記念事業計画大綱』より)

[点検・評価]

本学の理念は、学則、大学案内、ウェブページで公開されており、80周年パンフレット、大学60年史等、機会があるたびに掲載されている。大学史史料室では、資料の整理と記録の刊行をおこなっている。本学の理念は、本学の構成員ばかりでなく、学外者に対しても周知されるよう意図されており、また、そのためのメディアも出版物ばかりでなく、インターネット等を活用し、アクセスしやすいものに展開されている。

[改善・改革方策]

本学の理念・目的・目標の周知の方法は、現状把握で述べたように複数のメディアで周知されており、現状を継承していくことが望まれる。

A群 造形学部理念・目的・目標とそれにとまなう人材養成等の目的の適切性

[現状把握]

造形学部は、「美術、デザイン及び建築に関する学術の中心として、広く知識を受けるとともに、深く専門の技能、理論及び応用を教授研究し、人格の完成を図り、個性豊かな教養の高い人材を養成し、もって文化の創造発展、国家社会の福祉に貢献することを目標とする。」という理念のもとに、昭和37(1962)年に狭義の美術である、日本画、油絵、版画、彫刻に関する専門と、デザインに関する専門の学科を有する学部として創設された。その設立の趣旨は次のようなものである。

本学は従来の武蔵野美術学園の伝統と教育実績を継承し、さらにそれを創造的に発展させる意図のもとに発足したものである。学部の名称が造形学部というのも耳新しいが、本学開設の意義は、わが国においてユニークな性格を担って、新しい真の造形教育の方向を樹立しようとする処にある。(中略)

美術学科は、厳しい造形力の中で深い人間精神を表現し、培養するものとしての美術を教授しようとするもので、すぐれた技術、これに対する情熱と誠実さをもって、よき社会の創造に参加し得るような健康な国民の養成を目的とするものである。そのためには学習の前半において、準備教育としての基礎を養うことに意を用いる。(中略)後半においては、作家の表現したい感動を与えられた素材により、あらたに造形していくという作家としての基本的態度を指導するものである。(中略)

産業デザイン学科は、学生の造形能力や感覚の自由な発展を目的とし、特に、デザインの基礎教育を重視する。民族と時代を問わず万人に共通した人間の精神感情感覚や不変なデザインの基本形態の存在を理解した上で、(中略)常に移りゆくあらゆる生産およびに宣伝に敏感に感応し得る潜在力をもったデザイナーの養成という社会

## 大学の理念・目的

的必要に応じようとするものである。」(有光次郎学長「大学の教育方針」、『武蔵野美術大学 60 年史』、平成 2 (1990) 年)

### [点検・評価]

造形学部はこの理念と目的のもとに、作家、学校教育者、社会教育者、デザイナーをはじめとする、多くの美術の専門家を輩出するとともに、社会における造形の役割を提唱し、この活動をおこない、敷衍に努めてきた。

造形学部設立以降も、造形学部の内発的な展開と、また同時に社会からの「造形」の専門家養成の必要性の要請に応じて、「遊具から建物、そして都市まで、美術としての建築デザイン」を目的とした建築学科(昭和 39 (1964) 年に産業デザイン学科の専攻として、昭和 40 (1965) 年学科となる)、「デザインの諸領域を横断する基礎デザイン学の探究」を目的とした基礎デザイン学科(昭和 42 (1967) 年)、「デジタルを共通基盤として総合的な視野から映像を創造する」ことを目的とした映像学科(平成 2 (1990) 年)、「芸術学、メディア、マネジメントという視点からアートとデザインを社会と結ぶ」ことを目的とした芸術文化学科(平成 11 (1999) 年)、「テクノロジー、メディア、社会科学の視点から新しいデザインする力を創造する場」を目的としたデザイン情報学科(平成 11 (1999) 年)を開設し、造形の専門家の人材養成を充実させてきた。

さらに、平成 14 (2002) 年の通信教育課程開設主旨には次のように述べられている。

美術・デザインは、今日、社会のすみずみに浸透し、生活の豊かさを実現するうえで欠くことのできない役割を果たしています。また一方で、時間や場所に制約されず、さまざまな機会に学び、あるいは生涯を通じて学び続けていく、新たな学びの時代が訪れています。広く社会に、時代に、そしてあらゆる人々に開かれた大学をめざして、さまざまな改革を進めてきた武蔵野美術大学はこうした要請に応えるために、2002 年から造形学部通信教育課程を発足させた。(『造形学部学科案内』、平成 17 (2005) 年)

### [改善・改革方策]

これからの社会において、造形の意義はますます重要視される。この分野の専門家養成において、平成 18 年度から本学の 11 学科 2 専攻に対応する狭義の学科別専門教育とそれらの学科別専門教育に通底する広義の造形教育との均衡をどのようにしていくのかが、入試制度、教育制度を展開していくうえでの鍵になる。造形学部では、入試や教育に関する委員会、将来構想の検討の中で常にこの議論が繰り返されてきた。美術系学科の間でも、またデザイン系学科の間では一層顕著に学科間の専門性の重複が見られ、学科間にまたがる新たな専門領域が立ち現れている。このことを踏まえて、もちろん現在の造形学部学科構成そのものが造形学部の短所とは見なされないとしても、上述の課題に対して、今後も学科構成とその適正人数については教授会を中心に継続的に検討していかなくてはならない。

A群 造形学部理念・目的・教育目標等の周知の方法と有効性

<本学は単一学部からなり、「大学の理念・目的・目標の周知の方法と有効性」と内容的に重複するので省略>

## 2. 大学院造形研究科の理念・目的・目標

A群 大学院の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性

### [現状把握]

「学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成し、もって文化の発展に寄与する」（大学院規則）ことを目的として、平成 48（1973）年に修士課程を開設した。修士課程は、造形学部の教育とのつながりを配慮し、造形学部の学科に対応するようにコースを設置し、そのコースを大きく、美術専攻とデザイン専攻としている。美術専攻には、日本画、油絵、版画、彫刻、造形学、芸術文化政策のコースがあり、デザイン専攻には、視覚伝達デザイン、工芸工業デザイン、空間演出デザイン、建築、基礎デザイン学、映像、写真、デザイン情報学のコースがある。

平成 16 年には、より突出した制作者や研究者を養成するために、博士後期課程を開設した。博士後期課程は専門のコース制はとらずに、相互に影響しあう、作品制作、環境形成、美術理論の研究領域を設け、それらかなる造形芸術の 1 専攻である。その理念は、「美術、デザイン、映像、をはじめとする、今日の造形芸術における表現領域は、専門化し深化する一方で、多様化、横断化、複合化へ向かう状況が生じています。この状況に対応するために、専門性をさらに深めつつ、隣接する造形芸術の領域や関連する学術の成果を踏まえて、それらの連繋のもとに表現や研究をなしうる人材の養成をめざしています。」（大学院設置趣旨）

### [点検・評価]

博士後期課程の開設にあたり、教育理念・目的の策定を通して、修士課程の教育の在り方についての課題が明らかになった。たとえば、造形研究科の下位専攻として美術とデザインの二つの専攻の設置、学部の学科や専攻等を基礎にしたコースの設置、などについてである。

### [改善・改革方策]

学部のカリキュラム改編や新学科の設置、学科定員等の見直しがなされ、他方で博士後期課程の検討がなされた過程で、修士課程の教育理念とその教育組織等について検討課題が提起されている。この検討を研究科委員会で速やかに行なう必要がある。

## 大学の理念・目的

また博士後期課程については、完成年次を目標に、そこで生じた問題や課題を点検し、必要があれば改善しなければならない。

### B群 大学院の理念・目的・目標とそれに伴う人材養成等の目的の達成状況

#### [現状把握]

造形研究科においては、昭和 48 (1973) 年修士課程開設以来、小規模ながら理念・目的に基づく人材養成が達成され、専門的職業人、研究者、専門的知識を身につけた教育者、等を輩出してきた。平成 16 年の修士の学位授与は、美術専攻 36 名 (定員 28 名)、デザイン専攻 30 名 (定員 28 名) である。博士後期課程が平成 16 年に開設されたため、博士の学位授与の実績はない。

#### [点検・評価]

博士後期課程については、博士後期課程運営委員会においてその問題や課題が議論されている。修士課程については、平成 12—13 年の自己点検評価委員会のもとに、大学院点検評価実務作業委員会がはじめて設置され、修士課程各コースに対して教育の考え方や課題、現在の問題等のアンケートを行ない、その結果に基づいて、点検評価がおこなわれたばかりである。

また、主任教授による学科定員等検討会議 (平成 15—16 年) のなかで修士課程定員の在り方、コースについて検討され、写真コースが平成 17 (2005) 年より開設されることになった。修士課程の全体に及ぶ検討は追っておこなうことになった。

#### [改善・改革方策]

修士課程教育の点検評価は、上述のように途についたばかりである。博士後期課程運営委員会や学部のカリキュラム委員会に相当する委員会を設置し、検討を推進する必要がある。